

平成 31 年 4 月 15 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880137
氏名 田陽子
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 メリーランド州 カレッジパーク市 (国名 米国)
2. 研究課題名 (和文)：中華民国の対日賠償要求問題—米国の日本占領をめぐる米ソ対立を中心の一
3. 派遣期間：平成 30 年 4 月 17 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日 (349 日間)
4. 受入機関名・部局名：メリーランド大学 カレッジパーク校
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

受入れ先のメリーランド大学カレッジパーク校を拠点に米国国立公文書館、米国議会図書館、メリーランド大学プランゲ文庫、同大図書館を中心に第二次世界大戦後の対日賠償要求問題とそれらに関連する文献史料調査を実施した。特に、東京の国立国会図書館にも所蔵されていない国務省、軍関係機関、国際戦後処理機関における賠償問題、対日占領政策に関連する米国の政府文書を幅広く収集することができた。このように機関を横断した史料群を時系列で見ることができたおかげで、米国側の政策決定過程や政策決定に影響を及ぼす諸機関の位置づけなどがより明らかになった。また、米国の政府史料の保存体系の一端やその開示状況を知ることで、同国の歴史に対する認識や史料開示に対する姿勢について理解を深めることができた。どのような史料が恣意的に残されているのかを常に留意しながらそれらの史料を研究に用いることの重要性をあらためて実感している。

本年度の研究成果として、昨年度及び本年度に収集した史料を援用して、論文一本と研究ノート一本を査読付き学術雑誌に掲載することができた。さらに、2019年10月に開催される米国の Association for Asian StudiesのNew York地域会議での報告を現在申請中である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今後も、派遣先である米国で得た数多くの文献史料と知見を援用しつつ、引き続き中華民国の対日賠償要求に関する研究を進めていく予定である。具体的な研究計画として、次年度は国内での学会発表2件の申請、現在申請中の米国での学会発表1件を予定している。さらに、これらの学会で得られる助言を参考にして、順次論文投稿を行う。特に、米国の学術雑誌での論文掲載を目指していきたい。次年度以降も、これまでの史料調査を基に国内外での発表を継続していく。

派遣先における史料調査の過程で、日本の戦後賠償を扱う本研究が、米国の対日占領政策だけでなく当時の広範な国際問題に密接に関係していることを再認識した。そこで、派遣先ではそれらに関わる史料を幅広く収集した。今後、中華民国の賠償要求に影響を及ぼしたと思われる諸問題に注目し、米国側と中華民国側との史料の照合を行いたい。

また、今回の米国での研究活動を通じて、戦中戦後の「米国社会」のあり方という視点からも本研究を考察すべきではないかと考えるようになった。今後、この視点からも研究を進めたい。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

受入れ先である同大では、米中台関係の授業を聴講し、台湾をめぐる米中関係の変遷や、経済・安全をめぐる最近の米中関係の変化について米国側の視点から多くの学びを得ることができた。その他、研究機関が数多く位置するワシントン DC に近いこともあり、米中関係や日本、朝鮮半島、中国等を含む東アジア地域と米国の安全保障に関するセミナーに参加する機会を得た。これらの国際関係に関する授業やセミナー等の参加や同地での生活を通じて、同分野における米国の学術的傾向だけでなく、米国政府、議会の見解や報道との温度差を身近に感じることができた。現地ならではの貴重な経験であった。

今回の派遣では、将来目指すべき研究者かつ教育者という視点でも多くを学ぶことができた。同大の政府・政治学部では、各教授が提出した論文のドラフトに対して、その他教授陣がアドバイスをするというワークショップが度々開催されていた。短時間集中で行われるこのワークショップでは、使用する資料・データの性質や論旨の一貫性について毎回、非常に厳しいアドバイスが出された。自身の研究も顧みなければならない。また、同大での授業の聴講では、効果的な資料やデータの選び方、問題の提示の仕方、学生の関心を引付けて問題に対する分析を学生に促す授業の進め方など、この先、参考とすべき点が非常に多かった。

最後に、多くの時間を過ごした米国国立公文書館、議会図書館では史料収集はもちろんのこと、アーキビスト、リサーチャーとも知り合い、多くの方々から史料調査に必要な有益なご教示を賜った。そして、一年にわたる滞在を気さくに支えてくださった。この派遣にあたっては、海外行きを支持してくれた指導教員、受入れを快諾してくださったメリーランド大の教授をはじめ、多くの方のご厚意に支えられたと心より感謝している。これからも、この派遣で得たつながりを大切にしていきたい。